

土地利用と段彩から地理の見方を習得する

愛知教育大学教授 寺本 潔

地図帳を開くとカラフルな「色」が目飛び込んできます。資料図を除いた多くの地図で、黄緑、うす茶（黄色も含む）、水色の3色が印象に残ります。黄緑系は水田を示します。とりわけ日本の地方図では、水田の黄緑が鮮やかに目立って見えます。たぶん、うす茶系が背景色となって緑系の「田」や「畑」「茶畑」などを目立たせているのでしょう。また、水色系の海や湖も海岸・湖岸付近の土地利用を引き立たせてくれます。このように土地利用につけられた色をいわば「地」と「図」の関係で見ることが、土地利用に興味をもってもらう地図帳学習のファーストステップなのです。

1 土地利用は地域の開発を物語る

（表紙裏地図を参照してください）

帝国書院『中学校社会科地図（初訂版）』（以下、地図帳）p.99～100に掲載されている東京大都市圏のページを例にして土地利用の指導ポイントを述べましょう。

この図幅には、凡例が右上についています。そこに「市街地の変化」があり、オレンジ色と黄色の2色で市街地が塗られています。この2



色にまず焦点を当てて、生徒に「東京の周辺に広がるオレンジ色の範囲をていねいに指でたどってみなさい」と指示します。「ていねいに」がミソです。ほんやりと眺めていては見えません。

オレンジ色の範囲から何が見えてくるのでしょうか？答えは東京圏の若い姿です。オレンジ色の範囲を東西南北で確認すると「千葉市の方角には東京湾岸に沿って細いオレンジ色の場所が見つかるだけなのに三鷹市や立川市のある西と川崎・横浜市のある南、そしてさいたま市のある北には太いオレンジ色が広がっている」という事実が発見できます。オレンジ色の土地利用は、1960年ごろの市街地の範囲を示しているので高度経済成長期以前にすでにこれらの地域は市街化が進んでいたわけです。同時にオレンジ色以外の土地はその当時はまだ田畑が残っていたことを示しています。

次に「黄色の範囲はどのように広がっていますか？」と問いかけます。生徒から「オレンジ色の外側にまるでアメーバーの形のように広がっている」と答えを引きだせたら成功です。黄色の範囲が、鉄道や主要道路に沿って神奈川県や埼玉県、そして千葉県にも伸びています。オレンジ色と黄色の範囲を含んで「東京大都市圏」といういわば大人の姿に成長したのです。

さらに「①-」という記号が東京駅に約1時間で行けるところであることも付け加えて



帝国書院『中学校社会科地図（初訂版）』p.99～100
 下さい。この地点が伸びる場所と黄色の伸び方を照合させます。そうすれば鉄道や高速道路が建設されている路線が、同時に黄色（現在の市街地）が伸びる場所であり、東京の結節地域（通勤や物流で中心と周辺がつながっている範囲）であることが読み取れます。

一方、緑系の水田や畑が埼玉、茨城、千葉の各県に広がっていることにも気づかせて、「東京の周辺にはどうして緑系の土地利用が広がっているのですか？」と問いかけてください。近郊農業の意味が理解できるはずですよ。ところどころに散在している果樹園を示す赤い斑点も近郊農業の意味を示しています。

凡例をもう一度見てみれば、赤色が「ビル街」薄い紫色が「工業地」であることに気づきます。赤色はビルが集まっている場所だから都市圏の核にあたります。東京や横浜の心臓部です。また薄い紫色の工業地が水色系の東京湾岸や荒川下流（川口市付近）に広がっている姿にも気づかせてほしいものです。

東京という大都市を生き物にたとえれば、東京湾が口に見えてきます。さしずめ荒川は食道でしょうか。工業地はその口に生えた歯です。歯がなくては東京という大都市圏も生きていけません。

以上のように土地利用の違いや市街地の変

化、ビル街や工業地の分布は、東京の開発を物語るのです。

2 地図を重ね合わせてみる

土地利用と関連づけ、さまざまな要素と重ね合わせて地域をみるレイヤー（層）地図の考え方も大切です。地域はいろいろな事物・事象でつくられた薄い層のようなもので、層の重なり合いで地理的な現象（都市圏など）が生じるという考え方です。人口が集まっている層と地形的に低い土地の層、交通機関が発達している層、工業地帯の層が、ほぼぴったりと重なりやすいことなどは、代表的な見方です。



帝国書院『中学校社会科地図（初訂版）』p.6

このことは地図帳p.5～6の下部に「地図帳で都道府県を調べよう」のコーナーで詳しく示されています。ここでは福島県を例に解説されています。手順として河川と高さの色分け、市の記号、交通の要素、土地利用と産業記号、歴史地名を地図帳からぬきだし、トレーシングペーパーにそれぞれを写し取り、合計5枚のレイヤー地図をつくること、それらの地図を複数重ね合わせてじっくりとレイヤー同士の関係を考えることなどが示されています。

こうした作業学習によって、地域は複合的

に成り立っていることに気づき、地理的な見方・考え方の基本が身につくこととなります。さらに地図の重ね合わせに加えて、統計やほかの資料図と組み合わせれば、資料活用能力も高めることができます。地図の重ね合わせは、思考の重ね合わせにもつながるのです。複雑な現代社会を読み解く力として重要な学力なのです。

3 等高段彩で山地を読み取る

凡例に示された「森林・その他」の欄に標高ごとに色分けされた等高段彩がつけられています。これを使って中部地方の地図（p.91～92）を見てみましょう。標高1400m以上の山岳と1400m未満の山地や平野との違いははっきりとイメージできます。

飛騨山脈、木曾山脈、赤石山脈の東南斜面に影がつけられ、立体的に見える工夫が施されています。これは人間の錯覚を利用したもので、レ



帝国書院『中学校社会科地図（初訂版）』p.91

タリングで文字を目立たせる場合に字の右下を太くする工夫と同じです。雪を山頂に抱いたような日本の屋根をイメージできるページです。一方、等高段彩の凡例で土地利用とかわかりが強い標高はもちろん0～600mの範囲です。

凡例では0～600mが同じ区分けになっ

ていますが、細かく地図を見れば、0～600mの標高帯に水田や市街地の土地利用も入っていることがわかります。つまり、都市の主要部分はこの標高帯の下半分を占めている事実もきちんと教えたものです。先に紹介した交通機関のレイヤー地図（トレーシングペーパーをかけて鉄道や高速道路、主要国道だけを写し取った交通機関の地図）と600m以上の段彩で塗られた山地の地図を重ね合わせて考えるとほとんど重ならないことがわかります。交通機関がある場所は傾斜のきつい山地を通りにくく、平地を走っているといっているので、結局市街地は低い土地に集中しがちであること、さらに工業地も多いことなどが読み取れてきます。つまり、地図の重ね合わせによって新しい気づきが学べるのです。

4 「地図をみる目」を活用する

各地方の地図には鳥の顔をアイコンにした「地図をみる目」の示唆があります。たとえば九州地方の地図には「ハウス栽培のさかんなところは、輸送に便利ように高速道路やフェリーなどの交通機関と密接にかかわっている点に着目しよう」とあり、中部地方の地図には「日本海側、中央高地、太平洋側では、地形や土地利用のちがいなどからさかんな産業が異なっていることに着目しよう」と記されています。これらの示唆を活用して地図で見られる土地利用や産業を支える諸条件（交通機関、産業記号、市町の記号など）を関連づけて読み取らせることができます。

「地図をみる目」は地図で読み取れる複数の事象の関連づけを示唆したり、地域の変化や人や物の動きを類推したりする動的な思考を促す内容になっています。地理の見方を学ぶことの意義はまさにここにあるのです。